

17th ICFIA へ参加して

山形大学大学院理工学研究科 水口仁志

はじめに

2011年7月3日(日)から8日(金)まで、ポーランド共和国のクラクフにて第17回フローインジェクション分析国際会議(17th International Conference on Flow Injection Analysis)が開催された。筆者はICFIA初参加であり、またFIAそのものも初心者の身であるが、酒井先生、今任先生よりこの度の報告記の執筆のお話をいただき、せっかくの機会なので筆を取らせていただくことにした。しかし筆者自身慌ただしい中での参加であったことと脱稿が急ぎであることから、本稿は筆者の見聞を中心にまとめた点、なにとぞご容赦いただきたい。

日本からの参加者(敬称略・順不同)は、酒井忠雄(愛知工大)、手嶋紀雄(愛知工大)、栗原誠(静岡大)、本水昌二(岡山大)、大島光子(岡山大)、善木道雄(岡山理大)、今任稔彦(九州大)、牧知治(九州大、学生)、小熊幸一(千葉大)、長岡勉(大阪府大)、床波志保(大阪府大)、水口仁志(山形大)で、今回はさらに、Analytical Sciences誌でいつもお世話になっている日本分析化学会の高島章子さんが同行された。

クラクフへの道のり

ポーランド南部に位置する古都クラクフは、人口が約75万人、首都ワルシャワに続く第二の都市である。日本からクラクフへ行くには、ミュンヘンかフランクフルトを経由することとなる。ポーランドはシェンゲン協定実施国であり、この圏内の空港にてパスポートコントロールをくぐった後は、ポーランド国内では特にパスポートをチェックされることはなかった。しかし、フランクフルトでのセキュリティチェックは成田よりもはるかに厳しく、忙しさに紛れて着の身着のままやって来た筆者は、つい持って来てしまったジッポライターが原因で早速お咎めを受けることとなった。

クラクフバリツェ空港に降り立った筆者は、ここで酒井先生、小熊先生、今任先生、手嶋先生、牧さんと合流する。現地通貨は空港内のカウンターで取得できるが、市内各所にある両替所に比べるとレートは決して良くない。空港から中心部への移動は、通常なら鉄道で20分ほどかかるが、今回は、主催者側で手配していただいたタクシーに乗って国際会議の会場でもあるホテルまで移動した。寒い。ひたすら寒い。あいにくの曇天模様で気温は15度。まるで冷房全開の部屋であり、節電が流行る東京とは対照的な、北緯50度の西岸海洋性気候である。

クラクフ市内

この国の公用語はポーランド語である。アルファベットが並んだ地名であっても、何と読むのか皆目検討もつかない。一方で意外だったことは、若い方を中心に英語が通じることである。ホテルや美術館の受付、街の酒屋、コンビニ、レストラン、さらには現地の通行人に道を聞く時さえ英語が通じた。しかしホテルから最寄りのバス停にある売店の女性やバスの運転手には通用せず、その際は身振り手振りで意思を伝えて切符やライターを購入するか、現地の言葉で書かれたメモを見せて理解していただいた。ガイドブックによれば、年配者ほどロシア語が通じるという。まるでこの国の現代史がそのまま投影されているかのようだ。市内の人々はとても親切で、路線バスの車内にある券売機の使い方や、目的地までの道順などを教えてくれた。治安は東京よりもはるかに良い印象である。

クラクフは、第二次世界大戦の戦禍を免れた数少ない都市の一つであり、旧市街地には中世の街並みと風景が現存している。ヨーロッパ最大級の中央市場広場の中心には、ルネサンス様式の優美な織物会館があり、1階はみやげ物屋がぎっしりと軒を連ね、2階はポーランド絵画のギャラリーとなっている。これらの絵画が描かれたのは18~19世紀にかけてであり、周辺諸国による侵攻によってポーランドという国が地図上から消滅した時代と重なる。そのためか、全体的に戦乱による人々の苦しみを描写したものが多いように感じられた。しかし絵画はどれも迫力があり、特に描かれた人々の表情に筆者は圧倒された。

この織物会館のある中央広場の周囲にはオープンテラスのレストランが並ぶ。時折通りかかる馬車は、旧市街地の風景とマッチして、蹄の音も心地良い。どこからともなく流れるトランペットの音もまた印象的である。聖マリア教会の窓から1時間ごとに4方向へ演奏されるのだが、トランペットは途中で切れてしまう。敵の襲来を知らせるラッパ吹きが演奏の途中で撃たれたのと同じように、ここでの演奏も途中までとなっている。クラクフの旧市街地にはた



くさんの教会が点在しており、重厚な宗教彫刻とステンドグラスに囲まれ、現在でもミサが行われている。7月5日の夕方に企画された市内観光では、旧市街地にあるこれらの教会や大司教宮殿、ヤギェウォ大学、ヴァヴェル城と、ひたすら歩いた。最後はユダヤ人地区であるカジミエーシュに点在するシナゴグ（ユダヤ人教会）を訪ね歩いて解散。参加された方々もさすがに疲労が隠せない様子であったが、クラクフの街並みと風景を十分に堪能できる中身の濃い散策であった。

さて、ポーランドのおみやげといえば、ポレスワビエツ陶器と琥珀のアクセサリーである（と、ガイドブックに書かれている）。街中のいたるところにこれらを専門に取り扱うお店があり、事前にチェックしてきた先生方は丹念に品定めをしておられた。筆者も家族へのおみやげをいくつか購入したが、終ぞ観光に関する下調べをせずにここまで来てしまった筆者にとって、女性の方々のご意見は大変に参考になった。

17th ICFIA

このような美しい古都クラクフで開催された17th ICFIAの会場は、中心部から南西方向に徒歩で20分ほどの距離にあるPark Inn Hotel by Radissonである。市内を流れるヴィスワ川を渡った先にあり、クラクフの街並みとは一線を画したモダンな佇まいである。筆者が宿泊した部屋は禁煙であったが、ホテルの入り口には灰皿が完備されており、実に過ごしやすいホテルであった。フロントの係員も大変親切で、ルームキーを部屋の中に置き忘れて外出した時も、交換して無効になったカードキーを持って再び外出した時も、笑って対応していただいた。

17th ICFIAは、このホテルの1st floorで開催された。7月3日はウェルカムレセプションが催され、4日の朝のオープニングセレモニー、G.D.Christian先生によるOpening Lectureに引き続き、Special Lectureが2件、Keynote Lectureが7件、Invited Lectureが10件、Commercial Technologyが1件の他、

Oral Presentationが34件、Poster Presentationが74件行われ、総勢150名ほどの参加者を集めての開催となった。初日から議論が白熱し、新参者である筆者はその場の雰囲気には圧倒されるのみであった。この他、5日夕方には旧市街地の観光、6日は、クラクフからおよそ100km南に位置するザコパネへのエクスカージョン、7日の夜にバンケットが催された。

バンケットは、ヴィスワ川のほとり、ちょうどヴァヴェル城の対岸に位置する日本美術・技術センター“マンガ館”にて開催された。この建物は、「京都クラクフ基金」によって1994年11月に開館したもので、浮世絵や日本刀などをはじめとする日本の古美術品約7000点が常時展示されている。カウンターの前の壁には、天皇皇后両陛下が訪問されたことが記載されており、日本とポーランドの文化交流における重要な場所である。会場の奥へ進むと河岸に面したテラスがあり、夕日を浴びたヴァヴェル城を眺めることができる。Paweł先生の開会のあいさつとともにバンケットが始まり、しばらくの歓談の後、フローインジェクション分析研究懇談会（JAFIA）の2010年度FIA学術賞の授賞式が行われ、この度の受賞者であるSpas D. Kolev先生、António Osmaro Santos Silva Rangel先生、手嶋紀雄先生へ、酒井先生より賞状と記念メダルが授与された。バンケットの終盤には、会場での生演奏に合わせて参加者らはダンスに興じた。日本には無いこの習慣に触れながら、明治時代に鹿鳴館を着想した者の気持ちを筆者は想像せずにはいられなかった。

おわりに

初めての参加であったが、大変に充実した一週間であった。17th ICFIAをお世話していただいた方々、ならびに日本から一緒に参加された先生方にはこの場を借りて深く感謝したい。来年は9月23～28日の日程でFlow Analysis XIIがギリシャで開催される。今後も続けて参加できるよう精進を誓って筆を置きたい（下の写真2枚は手嶋先生ご提供）。

